様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４４６１

研究課題名（和文）「無」の思想に基づくケア理論の構築とその臨床教育学的位置づけ

研究課題名（英文）Construction of a Theory of Care based on the Idea of "Nothingness" and its Clinical Pedagogical Position

研究代表者
稲垣　応顕（Inagaki, Masaaki）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：９０３０６４０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、思想研究と質的・現象学的研究の二つのアプローチを通して、①東洋的無の思想とケアの倫理との結合による「無心のケア」の理論構築と、②「無心のケア」理論の医療・教育・心理・宗教等が関わるケアの現場における実践性についての考察を行った。
　この成果は、定例の研究会や実践フォーラムの開催、各共同研究者による事例考察や理論研究の発表、ならびに本研究の報告書として作成した『無心のケア』（晃洋書房・2020年）の出版を通して、関連する諸領域の研究者や現場の実践者に向けて発信することが可能となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、「無心のケア」という独自の実践的なケア理論を打ち出すことにより、欧米文化圏のホスピス運動から提言されたスピリチュアルケアのあり方に対して、日本型スピリチュアルケアのあり方とも言うべき、日本の精神文化に即したケアの方向性を示すことができた。さらに、従来のケアの概念を大幅に拡充するとともに、理論と実践との融合を見据えた「臨床の知」の本来的な意義についても再確認した。「無心のケア」の理論は、今日の新たな倫理基盤としてのケアの社会の中にあって、成熟した精神性に根差した新たな共生主義の展開を模索する一助となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research, through the two approaches of ideological research and qualitative and phenomenological research, (1) We constructed the theory of "Mu-shin no Care(Care as Nothing-mind)" by combining eastern philosophy of “Nothingness (Mu)” and the ethics of Care, and (2) We examined the practicality for theory of "Mu-shin no Care" in the field of medical care, education, psychology and religion.
As the results of this research, we were held at regular “Study Groups” and “Practice Forums”, announced case studies and theoretical research presentations by collaborators, and published ofan academic book "Mu-shin no Care" (Kouyo Shobo, 2020) which prepared as a report of this research. Through this, it became possible to send it to researchers in various related fields and practitioners in the field.

研究分野：教育学

キーワード：無の思想　ケアの思想　無心のケア　スピリチュアルケア　ケアリング　臨床教育学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、現代思想の新たな課題である「ケア」の思想と東洋の思想伝統であり今日ますます注目されている「無」の思想とを結びつけることによって成立する「無心のケア」について、その理論構築を目指すものである。具体的には、①哲学・思想文献の解析と②実践事例の検討という二本の柱を軸として研究を進めていく。本研究の開始当初の背景について、共同研究者のこれまでの研究活動と役割をもとに以下に述べる。

①に関して。まず、「ケア」の思想の整理については、倫理学研究のセビリア・アントンが、欧米の思想動向に詳しく、とりわけケアの倫理を京都学派の哲学との比較のもとに研究している。また、「無心のケア」のモデル構図を考えるための理論として、西平直の『世阿弥の稽古哲学』（東京大学出版会・2009 年）、『無心のダイナミズム』（岩波書店・2014 年）等の著作、坂井祐円の『仏教からケアを考える』（法蔵館・2015 年）が、その先駆的役割を果たしている。「無心のケア」の理論構築は、これらの著作の中で問題提起された内容に留意しつつ、これを継承・発展させていきたいと考えている。

②に関して。これまで西平直を中心として「無心とケア」に関する思想研究を行ってきたが、ここで考察された成果を、今度はケアの実際事例とを突き合わせて検討する必要性を感じている。本研究の構成員では、稲垣応顕が教育カウンセラー、小西達也がチャプレン、坂井祐円が臨床心理士であり、それぞれにケアの具体的な現場に関わっている。これら３名を主な事例の提供者として事例の検討を行うことで、理論と実践の融合を図り、臨床教育学的な考察へと昇華させていきたいと考えている。

２．研究の目的

本研究は、今日の共同社会を維持する上で不可欠な倫理課題となっている「ケア」の問題について、東洋の精神文化伝統の中心的な位置を占めてきた「無」の思想に基づいて捉え直していくことを目的とする。

具体的には、「無」の思想の実践展開である「無心」のあり方と「ケア」の実践とを結びつけることによって、「無心のケア」が成立する可能性を検証し、その理論構築を試みる。また、「無心のケア」が、教育・医療・福祉・宗教などのケアの現場において実際的にどのような意義を持ち得るのかを事例に即して考察し、これを臨床教育学的に位置づけることを課題とする。本研究を進めるに当たっては、哲学、倫理学、宗教学、教育人間学、教育カウンセリング、臨床心理学、生命学、死生学などの関連する諸学領域の知見を包括的に取り入れていく。

３．研究の方法

本研究の課題を期間内で達成するために、以下の 5 点の計画・方法で進める。

①「ケア」の思想および「無」の思想に関する国内外の哲学思想文献の集積・解析、ならびに先行研究の整理
②「無心のケア」の理論構築（思想研究）
③事例の検討（質的・現象学的研究）
④実践フォーラムの開催（教育・医療・福祉・宗教などの現場において、ケアを実践している人々との交流、意見交換など）
⑤学術書の出版

①に関しては、「ケア」の思想および「無」の思想について、海外の思想文献の調査・解析を、研究分担者のセビリア・アントンを中心に行い、国内の「無」の思想に関する文献の調査・解析を、他の参加研究者が個々人で行うとともに、文献の情報などを必要に応じて相互に共有する。
②に関しては、研究分担者の西平直、セビリア・アントン、坂井祐円の３名が原案を示す。「無心のケア」の理論構築を進めるに当たっては、年２回（７月と１２月）、京都大学にて研究会を開催し、研究発表と討議を行って、精査・検証する。
③に関しては、研究代表者の稲垣応顕から学校教育現場でのケアリングの実践事例の考察、研究分担者の小西達也から終末期医療現場でのスピリチュアルケアの実践事例の考察をそれぞれ提供、「無心のケア」との関連を探っていく。事例発表とその検討は、年２回の研究会の中で併せて行う。また、次年度に行う。
④に関しては、実践フォーラムを上越教育大学にて開催する。対象は、ケアの実際に関わっている教員、教育カウンセラー、看護師、医師、臨床宗教師などであり、内容は、各領域の参加者から「無心のケア」の実践事例をそれぞれ提供してもらい、本研究の構成員を含めたケアの実践に深く関わる識者からコメントと問題提起を行う。その上で、教育・医療・福祉・宗教の垣根を超えて参加者間での交流、対話を深める。

⑤に関しては、研究代表者・研究分担者および研究会に参加した研究者を中心に、『無心のケア』というタイトルの学術書を発刊する。これは本研究の成果内容を、ケアの実践現場や関係領域の研究者に問うものであり、ひいては本研究の総括となるものである。

４．研究成果

（１）研究会を通しての交流と活動

本研究の共同研究者の交流と活動の拠点として、「無心とケア」研究会を各年度に２回開催した。主な開催地は京都大学であったが、共同研究者の所属する大学：武蔵野大学（第 3 回）・上越教育大学（第 4 回）にて開催されることもあった。内容は、無心のケアの理論構築に関連する研究発表と事例検討である。参加者、発表者は、基本的には共同研究者によるが、会のテーマにより外部講師からの発表を行う。また、京都大学大学院教育学研究科の院生 2 名が参加し、第７回以降では研究発表の機会も得ていた。

各回の内容をまとめると以下の通りである。第１回は、科研費事業の趣旨説明と共同研究者による基調発表。第 2 回は、共同研究者による研究発表と事例検討（アメリカ仏教と緩和医療 GRACE（中川）、ケアの主体をめぐる考察（坂井）、生徒指導におけるケアの事例（稲垣））。第 3 回では、基調講演（西平）の後に、共同研究者による研究発表（スピリチュアルケアと仏教（小西）、生徒指導が必要とする教育関係（アントン））を行った。第 4 回では、臨床宗教師の活動をテーマとして、外部講師に桜美林大学チャプレンの土橋敏良氏、長岡西病院ビハーラ僧の森田敬史氏を迎え、「教育現場におけるスピリチュアリティ」、ならびに「緩和医療におけるスピリチュアリティ」について、それぞれ実践報告をしていただいた。第 5 回では、外部講師に関西学院大学助教のベネディクト・ティモシー氏を迎え、「参与観察としてのスピリチュアルケア」というテーマで実践報告をしていただいた。第 6 回は、学校教育と臨床教育学の接点をテーマとして共同研究者からの研究発表（アントン、稲垣）、および理論構築の中間報告として「「無心のケア」の成立と課題」（坂井）を発表した。第 8 回・第 9 回では、『無心のケア』（後述）の執筆者による研究発表と本研究の総括と評価を行った。

（２）実践フォーラムの開催

初年度に、上越教育大学において、実践フォーラムのためのプレフォーラムを開催した。このプレフォーラムを準備段階として、最終年度に計画案にあったような「無心のケア」に関する実践フォーラムを開催する予定であったが、講師の調整等が間に合わず実現できなかった。

プレフォーラムはシンポジウム形式で、「〈教育とケア〉スクールカウンセラーを考える」というテーマで行った。シンポジストは、様々な地域で活動しているスクールカウンセラー3 名で、水上和夫氏、横澤富士子氏、戸田弘子氏である。共同研究者の稲垣と坂井による企画で、司会と会場のファシリテーターを行った。

シンポジウムの詳しい内容については、後述する『スクールカウンセラーのビリーフとアクティビティ』に収録している。

（３）学術書の発刊

本研究の研究成果は、以下の学術書の発刊を通して、関連する研究領域に周知することが可能になったと考える。

①西平直・中川吉晴編『ケアの根源を求めて』（晃洋書房・2017 年）：ケアの主体についての考察をテーマとしており、「無心のケア」の理論的背景に言及している。執筆者は、本研究の共同研究者である、西平直、セビリア・アントン、坂井祐円、中川吉晴の 4 名で、各論文に対して執筆者同士のレスポンスがあり、対話型の思想研究のスタイルを取っている。

②稲垣応顕・坂井祐円編『スクールカウンセラーのビリーフとアクティビティ』（金子書房・2018 年）：スクールカウンセリングという制度のもつ意義についての考察を、「教育」と「ケア」の両面から捉え直していく試みである。無心のケアを実践する現場として学校教育におけるいのちといのちのふれ合いに言及している。プレフォーラムの内容を収録している。

③坂井祐円・西平直編『無心のケア』（晃洋書房・2020 年）：日本型スピリチュアルケアのあり方を、無心のケアという思想的転回から捉え直す試みであり、本研究の総括に位置づけられる。執筆者は、本研究の共同研究者、ならびに研究会に参加した院生や招聘した外部講師など 11 名（各章６名・コラム５名）である。この中、第１章「「無心のケア」という問題提起」（西平）では、「無心のケア」が投げかける様々な問い、ペイン、クライシス、ビリーフ、純粋分節などに立ち止まり考察を深めている。また、第 6 章「無心のケアが開かれるとき」（坂井）では、ケアの根源からの「無のはららき」に注目し、「無心のケア」が成立する契機について詳細に分析している。この著書の発刊にあたり、編者の一人である西平は「あとがき」の中で、無心とは「ケアの実際の場面において北極星の役割をもつ」とし、それはすなわち「言葉の限界であり、「言葉を超えた地平を予感させる何かであろう」と問いかけている。

（４）「無心のケア」の成立に関する６つの位相

本研究の総括的な成果として、無心のケアの成立に関するプロセスを６つの位相から考察した坂井の理論研究がある。ここでは、無心のケアを、「ケアの場において、ケアの主体が位相転換すること」と定義する。そして、この位相を次の６つの展開から捉えている。

【位相①】
わたしが・あなたを・ケアする
わたし　⇒　あなた　　わたしにとって　ケアは能動的なはたらきかけ
あなたにとって　ケアは受動的な受け取り
わたし　⇔　あなた　　わたしとあなたにとって、ケアは相互的なはたらき

【位相②】
~~わたしが~~・あなたを・ケアする　　〔わたし＝無心／受動性〕
↓
あなたが・ケアされる　　あなた＝脱自化（エクスターゼ）

【位相③】
~~あなたが~~・ケアされる　　〔わたし・あなた＝無心／受動性〕
↓
X　が・ケアしている　　ケアは　X によるはたらきかけ　＝　中動性

【位相④】
X　が・わたしとあなたを・ケアしている　　ケア：無のはたらき　＝　中動性
X ＝ 無 or ゼロポイント；超越的な何か（something beyond）が代入可
わたしとあなたの関係性（ケアの場）において、X のケアという行為が、現れている

【位相⑤】
〔わたし〕は・〔 X が・わたしとあなたを・ケアしている〕ことを・知っている
〔わたし〕＝特殊な二重性　⇒　二重の見、無心の心、無我の我

【位相⑥】
わたしが・あなたを・ケアしている　　わたしにとって　ケアは中動的なはたらき
あなたにとって　ケアは中動的なはたらき
無心のケアが〈日常的な所作〉として実現している　⇒　平常心是道

本当に無心であるのは、わたしでもあなたでもなく、「ケアの根源からのはたらき」ではないのか。たとえば、赤ん坊を抱っこする、子どもと戯れる、動物とふれあう、植物を育てる、などといった関わりにおいて、癒された、ケアしてもらった、と感じるときがある。その相手は、ケアしようとする欲求も意図もない状態でありながら、そこにケアの営みが生じている。このとき、ケアしているのは誰なのか。能動的な「ケアする」でもなく、受動的な「ケアされる」でもなく、中動態としての「ケアしている」。西田哲学の用語で言えば、超越的述語面＝絶対無の場所。このとき、ケアの場が《超越的な何か》に包まれている＝ケアの根源にふれている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 江田昌樹・涌井健太郎・稲垣応顕	４．巻 第38巻第2号
２．論文標題 青年期非行の心理的背景と指導の在り方に関する研究	５．発行年 2019年
３．雑誌名 上越教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 228-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松井理納・稲垣応顕	４．巻 第22号
２．論文標題 中学生・高校生の友人意識に関する研究-いじめ問題との関連に着目して-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ジャーナル　教育と時間	６．最初と最後の頁 46-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松井理納・稲垣応顕・犬塚文雄	４．巻 21
２．論文標題 学校教育臨床における時間的展望の意義	５．発行年 2017年
３．雑誌名 ジャーナル教育と時間	６．最初と最後の頁 12～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲垣応顕・加藤豊・佐野泉・馬場秀幸・山本奬	４．巻 -
２．論文標題 いじめ問題を取り巻くサポート資源	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本カウンセリング学会第50回記念大会発表論文集	６．最初と最後の頁 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥村栄朗・稲垣応顕	4．巻 -
2．論文標題 いじめ事後対応としての修復的正義実践に関する予備的研究‐ゼロトレランスと修復的正義の位置づけ‐	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本カウンセリング学会第50回記念大会発表論文集	6．最初と最後の頁 215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西平直	4．巻 35-1
2．論文標題 源流 Urquelleを求めて	5．発行年 2017年
3．雑誌名 人間性心理学研究	6．最初と最後の頁 101-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西平直	4．巻 Vol.2
2．論文標題 ケア論から見たスピリチュアルケア	5．発行年 2018年
3．雑誌名 スピリチュアルケア研究	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西平直	4．巻 86巻4号
2．論文標題 修養の構造－翻訳の中で理解される日本特有の教育的伝統	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育学研究	6．最初と最後の頁 473‐484
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂井祐円	4．巻 26巻
2．論文標題 公教育の現場で、押しつけにならない宗教教育の可能性を探る	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本仏教教育学研究	6．最初と最後の頁 199-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小西達也	4．巻 Vol.1
2．論文標題 「一/多」モデルに基づいたスピリチュアルケア理論の有効性の検討:S/C基本概念の明確化と実践課題解決の視点から	5．発行年 2017年
3．雑誌名 スピリチュアルケア研究	6．最初と最後の頁 35-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sevilla, Anton	4．巻 2
2．論文標題 Seito Shidô (Guidance) as a Space for Philosophy in Trans-lation	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Tetsugaku	6．最初と最後の頁 294-310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計9件

1．著者名 西平直・中川吉晴・セリビア アントン・坂井祐円	4．発行年 2017年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 275
3．書名 ケアの根源を求めて	

1．著者名 矢野智司・西平直　編著	4．発行年 2017年
2．出版社 協同出版	5．総ページ数 236
3．書名 臨床教育学　新教職教養シリーズ第3巻	

1．著者名 西平直・松木邦裕	4．発行年 2017年
2．出版社 創元社	5．総ページ数 168
3．書名 無心の対話　精神分析のフィロソフィア	

1．著者名 坂井祐円	4．発行年 2018年
2．出版社 法蔵館	5．総ページ数 192
3．書名 お坊さんでスクールカウンセラー	

1．著者名 西平直	4．発行年 2019年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 368
3．書名 ライフサイクルの哲学	

１．著者名 西平直	４．発行年 2019年
２．出版社 春秋社	５．総ページ数 200
３．書名 稽古の思想	

１．著者名 西平直	４．発行年 2020年
２．出版社 春秋社	５．総ページ数 216
３．書名 修養の思想	

１．著者名 坂井祐円・西平直　編著	４．発行年 2020年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 210
３．書名 無心のケア	

１．著者名 稲垣応顕・坂井祐円　編著	４．発行年 2018年
２．出版社 金子書房	５．総ページ数 154
３．書名 スクールカウンセラーのビリーフとアクティビティー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小西　達也 (Konishi Tatsuya) (00630708)	武蔵野大学・看護学部・教授 (32680)	
研究分担者	Ｓｅｖｉｌｌａ　Ａｎｔｏｎ (Sevilla Anton) (50754438)	九州大学・基幹教育院・准教授 (17102)	
研究分担者	西平　直 (Nishihira Tadashi) (90228205)	京都大学・教育学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	坂井　祐円 (Sakai Yuen) (70351244)	仁愛大学・人間学部・准教授 (33403)	
研究協力者	中川　吉晴 (Nakagawa Yoshiharu) (30340475)	同志社大学・社会学部・教授 (34310)	